

- ③わりなくまつはさせたまふ
④先づまうのぼらせたまひ
⑤やがてさぶらはせたまひ
⑥御前去らず、もてなさせたまひ

解説 この後の物語に描かれた、あまりに理想化された光源氏像はしよせん昔物語の主人公にすぎないからだという批判も多い。しかし、両親のままならぬ悲恋が語られるゆえに、対照的に、恋愛における自由人として思うままに行動できる絶大な魅力を備えた光源氏を読者は同情とともに受け入れることができるのである。

桐壺更衣への迫害

かしこき御蔭をば、頼み聞こえながら、おとしめきずを求めたまふ人は多く、わが身はか弱く、ものはかなきありさまにて、なかなかなる物思ひをぞしたまふ。御局は桐壺なり。あまたの御方々を過ぎさせたまひつつ、ひまなき御前渡りに、人の御心を尽くしたまふも、げに「こ」とわりと見えたり。まうのぼりたまふにも、あまりうちしきる折々は、打橋・渡殿のここか

通釈

かたじけない(帝の)ご庇護を(桐壺更衣は)頼みにし申し上げながら、更衣をあしざまに言い、欠点をお探しになる人(女御、更衣)は多く、自分自身はなんとなく病弱で、長生きもできそうもないありさまであって、(なまじ帝のご寵愛が厚いばかりに)かえってひどい気苦労をなさる。(更衣の)お部屋は桐壺である。多くの御方々(女御、更衣方)のお部屋の前を素通りなされて、(帝は)ひっきりなしに(桐壺へ)行かれるので、その方々が思い悩まれるのも、なるほど「無理からぬこと」と思われた。(更衣が帝のお側に)参上なさる場合にも、あまりひんばんな折々には、打橋や渡殿などのあちこちの通

しこの道に、あやしきわざをしつつ、御送り迎への人の衣の裾堪へがたう、まさなきことどもあり。また、ある時は、え避らぬ馬道の戸をさしこめ、こなたかなた、心を合はせて、はしたなめ、わづらはせたまふ時も多かり。事にふれて数知らず苦しきことのみまされば、いと、いたう思ひわびたるを、「いとどあはれ」と御覧じて、後涼殿に、もとよりさぶらひたまふ更衣の曹司を、ほかに移させたまひて、上局に賜はす。その恨み、ましてやらむかたなし。

路にけしからぬことをたびたびして、(更衣を)送り迎えなさる女房の着物の裾が汚れて堪えられないような、不都合なこともある。またある時には、どうしても通らなければならぬ馬道の妻戸を閉じて中に閉じこめて、(女御、更衣たちが)こちらとあちらで示し合わせて、(桐壺の更衣に)体裁の悪い思いをさせ、困らせなさる時も多くなる。何かにつけて、数え切れないほどつらいことばかりが増えるので、(更衣が)たいそう思い悩んでいるのを、(帝は)「たいそうかわいそうなこと」とご覧になって、後涼殿に以前から住んでおられる他の更衣のお部屋を、外にお移しになって、(桐壺更衣に)上局としてお与えになる。その方(後涼殿更衣)の恨みはまして晴らしようがない。

要旨 病身で他に頼れる人のいない更衣は帝のご愛情だけを頼りにしながらも、かえってそのご寵愛ゆえに悩みが増すようになり、感じられるのであった。帝がひっきりなしに更衣のお部屋桐壺にお通いになり、また更衣を清涼殿にお召しになるにつけて、ご寵愛を一身にお受けする更衣に対する他の女性方の非難、中傷、さらには陰湿ないやがらせが多くなつてゆくのである。

語釈・語法

- ①かしこき御蔭 形容詞「かしこし」は「畏し」で、おそれ多い、かたじけない、の意。「賢し」(賢明である、すばらしい)との区別に注意。
②ものはかなきありさま 「もの」は「なんとなく」の意を添える接頭語。「はかなし」は頼りないさま。なんとなく弱々しく頼りない(更衣の)ありさま、の意。
③なかなかなる物思ひをぞしたまふ 「なかなかかなり」で形容動詞、なまじつかないほうがよい、の意。副詞の「なかなか」

- は現代語と違って「かえって」の意。
④御局は桐壺なり 宮中では女御や更衣やそれぞれに仕える女房たちに部屋が与えられるが、その部屋を「局」と呼ぶ。「御」は接頭語。「桐壺」はその部屋のひとつ、壺中庭に桐の木が植えられていたことからきた名称。正式には淑景舎。「桐壺更衣」という呼び方は、この部屋に住む更衣ということによる。また帝のことも「桐壺帝」と申し上げている。
⑤あまたの御方々を過ぎさせたまひつつ

- △解答▽一 おのづから、かろき方にも見えしを 二
一の御子の女御 三 右大臣の女御・一の御子の女御・この御方(すべて弘徽殿女御を指す) 四 尊敬①③⑥
使役②④⑤